



Prognostic Impact of Statin Intensity in Heart Failure Patients with Ischemic Heart Disease: A Report from the CHART-2 Study

著者	及川 卓也
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	11301甲第17915号
URL	http://hdl.handle.net/10097/00123813

学 位 論 文 要 約

博士論文題目 Prognostic Impact of Statin Intensity in Heart Failure Patients with Ischemic Heart Disease:
A Report from the CHART-2 Study (虚血性心不全症例におけるスタチンの治療強度が予後へ及ぼす影響に
関する検討 -CHART-2 研究からの知見-)

.....東北大学大学院医学系研究科.....専攻

.....内科病態学 講座.....循環器内科学 分野

学籍番号.....B4MD5021.....氏名.....及川 卓也.....

研究目的：スタチンが虚血性心疾患患者の予後を改善することはこれまでに多数報告されており、虚血性心疾患患者やそのハイリスク患者における動脈硬化性疾患の1次予防、2次予防に広く使われている。しかし、心不全患者の予後に対してスタチン治療が影響するかどうかについては、スタチンが予後を改善しないとする報告と予後を改善するという報告があり、特に現在世界で急速に増加している虚血性心不全患者に及ぼす影響について検討の余地がある。さらに虚血性心不全患者の予後に及ぼす影響をスタチンの治療強度別に検討した報告はない。そこで、本研究では、CHART-2 (第二次東北慢性心不全登録その2; Chronic Heart failure Analysis and Registry in the Tohoku distinct-2) 研究のデータベースを用いて、虚血性心不全患者の予後に対するスタチン治療の影響をスタチンの治療強度や LDL コレステロール(low-density lipoprotein cholesterol) 値との関連に着目して検討した。

方法：CHART-2 研究に登録された慢性心不全及びそのハイリスク症例 (n=10,219) から、虚血性心疾患を基礎疾患にもつ Stage C/D の慢性心不全患者 2,444 例を対象とし、これらの患者を登録時のスタチン投与の有無とその治療強度により、高強度治療群、低強度治療群、非投与群の3群に分け、スタチンの治療強度が予後へ及ぼす影響について検討を行った。主要評価項目は全死亡と心不全入院の複合エンドポイントとした。

結果：対象症例中、高強度治療群 (n=868)、低強度治療群 (n=526)、非投与群 (n=1,050)であった。平均 6.4 年 (13,929 人年)の観察期間中、非投与群に比べ、高強度治療群(ハザード比 : 0.51, $P<0.001$)及び低強度治療群(ハザード比 : 0.67, $P<0.001$)は有意にイベント発症率が低いという結果であった。これらの結果は、傾向スコアを用いた IPTW (Inverse probability of treatment weighting) 法による患者背景の調整後も有意にイベント発症率が低いという結果であった(高強度治療群, 調整ハザード比 : 0.81, $P<0.001$; 低強度治療群, 調整ハザード比 : 0.84, $P=0.004$)。また、高強度治療群は低強度治療群に比べ、患者背景調整後の主要イベントの発症率は低い傾向 (調整ハザード比 0.88, $P=0.09$) にあり、心不全入院については有意にイベント発症率が低い(調整ハザード比 0.79, $P=0.02$) という結果であった。さらにこれらの結果は、LDL コレステロールの値には影響されなかった。

結論：虚血性心不全患者の予後に対し、スタチン治療、特に高強度のスタチン治療が LDL コレステロール値に関係なく、有益である可能性がある。